

【暗証聖句】

「このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。」コロサイ 1:29

【日・真理の霊】

ヨハネによる福音書 16 章 13 節に「その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」と書かれています。真理の霊とは聖霊のことですが、聖霊は私たちに真理が何であるかを悟らせてくれます。具体的には、聖書を理解できるようにさせてくれたり、自然界に働く神様の御手の業が見えるようになったり、神様が喜ぶことは何なのか、また悲しませることは何なのか、つまり罪が何であるかを悟らせる力があります。聖霊はどんな人にも良心を通して働きかけてきますが、それでも聖霊が直接働くまで、分からなかったことが色々あることを知るので。ところが、聖霊は真理を悟らせ、何が本当の罪であるかに目を開かせてはくれますが、それを守るように強制することはありません。あくまでも、善悪を知ったうえで、どうするかを選択は私たちの側にあるのです。それゆえ、真理を知っておきながら、正しいことができないというジレンマに陥ってしまうことがあるのです。もし聖霊が私たちに強制するなら、サタンの思うつぼで、神様は人を操作しているという口実をサタンに与えてしまうことになってしまうことでしょう。しかし、もし自分の意思を神様に明け渡し、主の心を一致させることを望むなら、聖霊は強力な助け手となって、私たちに導き、正しい生き方ができるようにしてくれることでしょう。主にゆだねることが大切です。

【月・神と人の協力】

コロサイ 1 章 28、29 節に「このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています」と書かれてあります。ここに、パウロは労苦していると言っています。労苦と言う言葉は、疲れ切るまで働くと言う意味の言葉で、アスリートが一生懸命トレーニングするような時に使う言葉です。真理に目が開かれ、主に自分を明け渡し、委ねて生きることがまず大切ですが、それは何の努力も必要ないと言っているわけではありません。恵み主義と呼ばれるような、主の恵みによって救われるのだから、私たちは何もしないでも良いのだという考えがありますが、一度真理に目が開かれた人は、罪の中にいる自分に耐えられなくなっていくものです。だから、労苦するのです。しかし、パウロは自分だけの力で成し遂げるとは言っていません。「わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています」と、言っています。ここが重要です。一人で戦うのではなく、内に働く主の力によって戦うのです。畑の土を耕し、種をまき、水や肥料を与え、雑草を抜き、額に汗しながら畑仕事をして、太陽が昇らなければ作物の実りはありません。雨が降りすぎても、降らな過ぎても良くありません。つまり、最後は自然の力、神様の力を仰ぐことになるわけです。それと同じように、私たちも神の子として完全な者として主に認められるような実を实らせるためには、み言葉を読み、祈り、罪から離れ、神様のために奉仕するなど、できる限りの努力を、内におられる聖霊の力によって行っていくことが重要です。まさに神様と共に生きるということです。

【火・訓練された意思】

ガイドの著者は、怒り、恐れ、欲望といった感情が、正しい意思の実行を妨げる敵となることがあると語っています。感情は決して悪いものではありませんが、感情というのは何が正しく、最善かといった判断には、ほとんど関係なく働きます。実際、感情は、しばしば人を裁いたり、人を憎んだり、現実をゆがめて見せたりする力となって働きます。聖書の中にも神様のみ言葉ではなく感情で決断した人たちのことが出てきます。たとえば、カインです。弟のアベルの捧げものだけ神様から褒め

られ、自分のささげものが顧みられなかったとき、怒りがこみあげてきて、弟を殺してしまったのです。最初の殺人事件ですが、感情がマイナスに働いた最悪のケースとも言えます。そこでペテロはペトロの手紙一 1 章 13 節で、「だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい」と勧めています。「身を慎んで」とは、酒に酔って判断力が鈍くなっているような状態ではなく、正常な状態で、自らをしっかりとコントロールしなさいということです。心を引き締めて、感情的になって我を忘れてしまうことのないようにせよということです。クリスチャンでも、時々感情を抑えることができなくなって、後から反省させられることがあるものです。いつも、穏やかな気持ちでいたいのに、なかなか簡単ではありません。もし簡単なことならば、「いつでも心を引き締め、身を慎んで」いなさいと聖書に書かれていないでしょう。ストレスをため込みやすい人は感情をコントロールするのが難しいとされています。だから、日ごろからストレスをあまりため込まないように意識的にストレスを発散させることが大切です。それと共に、祈りとみ言葉と瞑想の時などをもち、神様から平安をいただいて、少しでも穏やかな気持ちでいられる時間を長く持つように努力するなどの工夫も必要かもしれません。

### 【水・過激な措置】

マタイ 5 章 29、30 節「もし、右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。」

イエス様は随分と過激なことをおっしゃるものです。しかし、その分インパクトがあり、言いたいことが伝わってきます。それは地獄は本当に恐ろしいところであり、絶対にそこに落ちることがあってはならないということです。そして、そのための戦いは、簡単なことではないということです。しかし、本当に目をえぐり出す人はいません。また、イエス様も本当に目をえぐり出すことを求めておられるわけではありません。これは「みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、姦淫を犯したのと同じである」と言う教えの流れの中から語られた言葉です。問題は目や手というよりも心の中にあるものなのです。心をえぐり出すことはなできません。キリストの思いが私たちの思いとなり、一つとなることを求めること。私たちにできることは、ただそれだけです。しかし、このような願いこそ、主は喜んでくださるのです。

### 【木・忍耐する必要】

正しいことが何であるかわかっても、それを実行することができない。これはクリスチャンなら誰でも経験しているはずです。パウロもそうでした。パウロは、ローマ 7 章 15 節で「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです」と言っています。望んでいることはしないで、望んでいないことをしている自分が分からない。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」(ローマ 7:24)という他ありませんでした。しかし、次に続くローマ 7 章 25 節で「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」と語るのです。こんな罪深いものでも愛して、救ってくださるということは感謝しかありません。誇るべきものは何もないのに、むしろ望んでいないことばかりしてしまうみじめな者なのに、なぜ主は愛してくださるのでしょうか。ただ、ただ感謝しかないのです。

その上で、諦めることなく、聖なる者となることを求め続けていくことです。みじめな自分に打ちのめされそうになっても、忍耐して、主の愛を信じ続けて、時にはヤコブのように、主が祝福してくださるまで離しませんと、主にすがりつくように祈り続けることです。ヤコブは主が祝福してくださるまで手を離しませんでした。腿の関節を外されても、手を離しませんでした。このような祈りを私たちはしたことがあるでしょうか。祈り無くして勝利はありません。いつまでたっても聖なる者になった気がしないとしても、投げ出すのではなく、忍耐して祈り続けることです。少しずつではあっても、必ずその実りはあります。